

## 〔研究ノート〕

アラスカ-エスキモーの人種形質についての  
予備調査

武 部 啓

## I 緒 言

1977年夏期にアラスカのフェアバンクスで、アラスカ大学の厚意をうけて、エスキモーの民族生物学的調査を若干行なうことができた。

エスキモーの集団地といわれる地域、例えば内陸エスキモーの定住地アナクトブク・パス (Anaktuvuk Pass)、海岸エスキモーの集まるポイント・バロウ (Point Barrow) やポイント・ホープ (Point Hope) などで、長期間にわたる本格的な調査を行なうための予備視察に出向いたのであるが、たまたまフェアバンクスで機会と厚意に恵まれたので、小規模ながら敢えて調査を行なった。それでもなお十分に注目するに足る資料を得たと考えられるので、ここにその記録の一端を報告する。

稿を進めるに当って、今回の調査に便宜を与えられたアラスカ大学の厚意に謝意を表するものである。

## II 調査対象

東はグリーンランド及びラブラドルから西はベーリング海、さらにベーリング海峡に面したシベリア海岸の一部にわたる、約5万5000km<sup>2</sup>に及ぶ地域がエスキモーの居住地である。一年中氷雪に蔽われ、白夜の8月といえども日本の冬そのもので、フェアバンクスでは日中気温 2~3°C であ

り，気象上からは地球上最低の生活環境である。これらの地域に住むエスキモーの総数は約6万，アラスカだけでは約2万という。

フェアバンクスは人口約1万5000，アラスカ第2の都市で，郊外約5kmのところのアラスカ大学がある。ここは鉱業の町としていろいろの人種が集っているが，住みついているエスキモーは少ない。しかしここから北西約500kmのところ，内陸エスキモーの集団地アナクトブク・パスがある。アラスカ北部を東西に走るブルックス山脈の北斜面のツンドラ地帯に当り，昔からコケを求めてトナカイの1種のカリブー (caribou) の移動する通路であり，これを追うて狩猟生活を営むエスキモーの拠点であった。1959年に，アメリカ政府の指導で，内陸エスキモーの約20世帯100人余りがこのアナクトブク・パスに定着して以来，今日では約200人に増えているという。定着したとはいえ，冬期には家族ごとに南方の谷に分散してキャンプを張り，カリブーを追う。しかし短い夏期には交易や出稼ぎ，あるいは病気治療などのために，家族ぐるみフェアバンクスに出てきて滞在するものがある。

今回は，アラスカ大学の厚意で，そうしたエスキモーのうち成人39名（男22名，女17名）について身長・頭指数・蒙古皺襞・指紋・耳垢型・血液型・味盲を，また5歳までの小児11名について蒙古斑を調べた。

### III 調査内容

フェアバンクスで出会う人々の中で，幅広い顔・比較的円い頭・目尻のつり上った濃色の目などから，アメリカンインディアン以上にアジア系として識別できるのがエスキモーである。さらに，中身長・短い腕脚・黒色の直毛・黄褐色の皮膚・蒙古皺襞を伴う一重瞼などが日本人そっくりであるのは印象的である。

## 1 身長

調査したこのごく小人数からすれば、民族生物学的には中身長に属するといえよう。

身長(cm)	150以下	151～155	156～160	161～165	166～170	170以上
男	0	2	7	8	4	1
女	1	5	6	5	0	0

## 2 頭指数

これは  $\frac{\text{頭幅(側頭点-側頭点)}}{\text{頭長(眉間点-後頭点)}} \times 100$  で示される。

指数	70～75	76～80	81～85
男	1	9	12
女	1	8	8
計	2	17	20

男女とも中頭に傾いた短頭である。因に短頭はモンゴロイドの特徴とされている。

## 3 蒙古皺襞

目がしらの部分で上眼瞼から続く皺が下眼瞼の内側端を蔽い、従って目がしらにある赤味(涙囊)がかくれている形質で、モンゴロイドに多い特徴とみなされている。

皺襞	+	-
男	10	12
女	8	9
計	18	21

## 4 指紋

指紋は渦状紋・蹄状紋・弓状紋に分類される。このうち渦状紋と蹄状紋

との比率を指紋指数といい、民族形質として注目されている。

指紋	渦状紋	蹄状紋	弓状紋
男	12	10	0
女	9	8	0
計	21	18	0

これだけの例数から出した指数は単に参考的な意味しか持たないが、敢えて記しておく。

$$\frac{(\text{渦状紋})21}{(\text{蹄状紋})18} \times 100 = 116$$

因に日本人の指数は 89～90、中国人のそれは 100 以上である。

## 5 蒙古斑

小児の主として仙骨部またはその周辺に広がる帯青色の斑紋である。体色をきめる色素細胞がごく浅い表皮性であるのに対し、蒙古斑の色素細胞は真皮性であるのが特徴である。これもモンゴロイドに固有の形質と考えられている。これにはごく小さなつましいものから、背面のほぼ全域にわたり、ついには胸部から足の一部にまで広がるものまである。また濃淡もさまざまである。一般には5歳を過ぎると表皮下に埋れて見えなくなる。

今回は5歳以下の小児を対象にし、濃淡は考慮に入らず、仙骨の周辺に限られたものを軽度、上は背中中央辺りから下は臀部まで延びているものを中度、それ以上のものを重度として11人を分けると次のようである。

蒙古斑	軽 度	中 度	重 度
男	3	1	1
女	3	2	0
計	6	3	1

## 6 耳垢型

耳垢には2つの型がある。乾いて鱗屑状で灰色の乾型と、粘って飴状で

褐色の湿型とである。耳垢型も顕著な民族形質として注目されている。

耳垢型	乾 型	湿 型
男	20	2
女	15	2
計	35	4

この数字からは湿型の頻度は 10% となる。湿型は日本人では 20%, 中国人 4%, アイヌ 100%, 白人 90% であるから, エスキモーのモンゴロイド性がここでも明瞭である。

## 7 血液型

アラスカ大学で聞くとところによると, 州政府の厚生保健局による調査でエスキモーの血液型は相当詳細に判っているとのことであった。しかし検査設備が利用できるというので, その厚意をうけて成人と小児を合せた 50 名について直接調べた。

血液型	O	A	B	AB
実 数	45	0	5	0
%	90	0	10	0

日本人では  $O : A : B : AB = 32 : 37 : 22 : 9$  であり, アメリカンインディアンではほとんどが O で, ごく少数の B が混じている。これからすると, 血液型ではエスキモーはアメリカンインディアンに近い。しかし何分にも検査例が少ないので, 結論は別の調査にまたねばならない。

## 8 味 盲

Phenyl-thio-carbamide (PTC) を苦いと感じる (有味) か感じない (無味=味盲) かは, これが A. L. Fox によって発見された 1932 年以来, 世界各国で調査が行なわれ, 味盲の頻度の民族差が指摘されるようになった。

今回は成人 39 人について, PTC 味覚試験紙 (PTC 飽和溶液に浸して乾燥した濾紙) を用いて調べた。

PTC	味 盲	有 味
男	1	21
女	1	16
計	2	47

この数字だけからすると味盲率は5.4%となる。この味盲率は日本人は8%、中国人は6~11%、アメリカンインディアン9%、白人20~32%、インド人43%となっているから、この点ではエスキモーは極めて日本的といえる。

#### IV 考 察

今回の調査は、上述の形質に関する限り、エスキモーがモンゴロイド系であることを明らかに裏づけている。これは今更改めて取りあげる必要のない学界の通説になっていることであるが、その上でなお、エスキモーの起源について2つの対立する説がある。アメリカ説とアジア説である。

人類がベーリング海峡をこえアラスカを通してアメリカ大陸に渡ったのは、3~5万年前であろうと言われている。この古代種族は広く大陸に散っていったが、一部はアラスカから極北の地域に定着した。南方に下ったものはアメリカンインディアンとして、極北に定着したものはエスキモーとして、それぞれ特有の生活様式とそれなりの文化を発達させた。エスキモーは、従って、アメリカンインディアンより遅れて渡ってきた外来者ではなく、彼らと同じ土着の民族である。こう主張するのがアメリカ説である。ソ連の A. A. Зубов などはこの説を強く支持している。

これに対して、アメリカンインディアンより遙かに遅れてアジア大陸から渡ってきた種族は、南方に侵入することができず、極北に定着を余儀なくされた。このクサビ型侵入者がエスキモーであるというのが、アジア説である。C. S. Coon らはこれを主唱し、エスキモーはモンゴロイドの基準型としての北部モンゴロイドと考えている。

しかし今までのところ、この両説は主として民族学・考古学・言語学を中心とする文化人類学の分野で論じられており、自然人類学上の形質遺伝学的資料は必ずしも十分ではない。

今回の私の調査は、すでに何度も繰り返し述べたように、予備調査に向いた機会に行なった小規模のもので、この分野への寄与などは望むべくもない。しかしながらこの小調査で、いくつかの形質において、エスキモーがアメリカンインディアン的よりもむしろ日本人的であることが暗示されることは興味をひくのである。

## V 附 言

エスキモー (Eskimo) という語は、カナダのオタワ川地域に住んでいたアメリカンインディアンの一民族アルゴンキン (Algonquin) が名づけたもので、“生肉を喰う人間”の意味である。エスキモー自身は自分たちを“人間”を意味するインヌイト (Inuit) と称している。

盛夏でも 2~3°C、9 月には早くも根雪が降り、10 月下旬に最後の太陽が沈み、2 月に最初の太陽が昇るという極北での彼らの生計は、狩猟と漁撈によっている。内陸で対象となるのはカリブー・オオジカ・キツネ・ウサギ・マーモット、渡り鳥のカモ・ガン、川や湖では各種の豊富な魚である。一方海岸ではアザラシ・クジラ・セイウチ・シロクマなどである。それらの中でも狩猟の中心をなすのはカリブーとアザラシである。

カリブーの肉は重要な食料源に、その毛皮は衣服やテント用として生活必需品である。アザラシの肉はカリブーほど美味ではないが、皮は夏の狩猟や交易の旅には欠かせないカヤック (kayak, 一人乗りの皮舟) やウミヤック (umiak, 大型の皮舟) に、あるいは雪上靴やテントなど、利用範囲は広い。その脂肪は特に重要で、灯用に、料理用に、暖房用にと、日常生活とは切り離せないものになっている。植物性食物として野イチゴや野生セロリーなどが用いられるが、短い夏期に採取される僅かのものである。

もっとも近年になって白人社会との交流が容易になり定着化が進むとともに、小麦粉・砂糖・紅茶・果物などの使用量も増加しているという。

彼らがカリブーなどを食べるのを見ると、すべて生のままで、肉のみならず内臓・骨髓・角の中身・舌・眼球、時には寄生虫までも口に入れる。

住居は、夏はカリブーの皮のテント、冬は土小屋をつくる。雪小屋は一部の北方地区で今でも造られるという。しかし近年になって、アメリカ製のプレハブ家屋も多くなりつつある。

エスキモーは、居住地が極北であるという地理的制約のために白人の侵入を免かれ、長い間民族生物学的にその純粋さを保ってきた。H. V. Vallois などは、民族と人類の一致する典型的な例としてエスキモーをあげている。しかし近世に入り白人との接触が深まるにつれ、一部では混血が進んでいる。特にグリーンランドとラブラドルでは、白人との混血メスティーゾ (mestizo) が急増し、今日では純粋なエスキモーはほとんどいないであろうといわれる。

一方、第一次大戦後は白人社会から天然痘・麻疹・インフルエンザ・結核などが侵入し、死亡率が高まった。加えて強いアルコール飲料が入り、体が温まるという効果からこの寒地で愛用され、アルコール中毒が増加するのに反比例して、出産率が目立って減少した。そうした結果、エスキモーの人口的危機が憂慮された一時期があった。しかしその後、各国がとった保護政策が効を奏した。すなわち、予防並に治療医学の導入による幼児死亡率の低下、公衆衛生の普及による伝染病の防止、社会教育の向上による種族間の反目の解消などによって、自然増加率は徐々に持ち直しているという。最近の発表によると、アラスカのエスキモーの自然増加率は 0.8～1.0% という。

民族生物学の立場から敢えて言うならば、貴重な研究対象であるこのエスキモーが出来得るならば純粋な形で永く繁栄することを望むものである。



## 参 考 文 献

- Vallois, H. V.: *Les races humaines* (1944).
- Boyd, W. C.: *Genetics and the races of man* (1950).
- Neel, J. V. and Schull, W. J.: *Human heredity* (1954).
- Freuchen, P.: *Book of the Eskimos* (1961).
- 古畑種基: *血液型の話* (1962).
- Coon, C. S. and Hunt, E. E.: *The living races of man* (1965).
- Зыбов, А. А. (馬上義太郎訳): *人類の謎をとく* (1968).
- Stern, C.: *Principles of human genetics* (1973).
- 祖父江孝男: *アラスカエスキモー* (1975).
- Statistical abstract of the United States* (1976).